

目次

- ・ 1997年度 第3回研究例会報告
満洲の楠田五郎太：あわせて「満洲国」の図書館事情について（米井勝一郎）
『図書館史(近代日本編)7』の編集を終えて（山口源治郎）
- ・ 1998年度日本図書館文化史研究会 第15回研究集会・総会
- ・ 『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』が刊行される（小川 徹）
- ・ 研究例会・運営委員会のお知らせ

1997年度 第3回研究例会報告（1998年3月22日 法政大学）

満洲の楠田五郎太：あわせて「満洲国」の図書館事情について

米井 勝一郎

（愛知県立看護大学附属図書館）

1943（昭和18）年、楠田五郎太（1908～？）は「満洲国」の首都図書館——新京特別市立図書館で、婦人読書倶楽部を組織した。彼が組織したこの婦人読書倶楽部は、新京在住の18歳以上の婦人を対象にした会員制の組織で、会員の希望する図書を同館から借り出し、その自宅、あるいは予め会員が指定した場所に配本することを目的としたものである。配本に要する経費を、会員からの会費徴収によってまかっていたという、いわば図書館がそのサービスの対価徴収の便法として組織した「官製の民間団体」であった。

この読書倶楽部を介した配本事業は、岡山市立図書館以来の楠田得意の館外活動の一手法であるが、この手法のみが楠田の館外活動＝「動く図書館」ではない。彼の著作『動く図書館の研究』（研文館、1935）では貸出文庫・訪問図書館・移動図書館、それに一時的施設である海浜（臨海）文庫・街頭文庫といった多様な館外活動について述べてある。楠田の著作は館内閲覧を中心にした運営方法が主流となっていた敗戦前の館界では異色のものだが、彼は「動く図書館」に、当時地方中小公

共図書館が陥っていた閉塞した状況からの脱却と、公共図書館を市民全てに身近なものとする手段を見出していた。

しかし、敗戦前の図書館活動には、今日引き継ぐべき面があるにしても時代の制約を色濃く受けていたことは、すでに先行の諸研究によって明らかにされている。まして、アジア・太平洋地域の多くを巻き込んだ戦争の時代、楠田の「動く図書館」もそうした時代の枠組みから自由であり得るものではない。実際、彼の婦人読書倶楽部は植民地「満洲国」における民族差別の実態を忠実に表現するものとなってしまった。

楠田の「動く図書館」の舞台となった満洲、即ち中国の東北地区で近代的な図書館事業がはじまったのは清朝も末期のことに属する。植民地と利権をもとめて彼の地まで進出してきたロシア、そして日本の手によってその事業は開始されるのであるが、日本の国策会社満鉄の手によって設立された図書館は、内地の図書館に優るとも劣らない「良質」な図書館サービスを提供していた。一方、中国側においても、日本やロシアの、また関内での近代的図書館事業の展開に対応して図書館の設立が図られ、殊に奉天軍閥統治下、多くの公共図書館の設立とその充実が試みられていく。

1931（昭和6）年9月、満蒙問題の武力解決を企図する関東軍は奉天郊外の満鉄線を爆破し、これを期に軍事行動を開始、満洲各地の主要都市を制圧した。いわゆる満州事変の勃発である。この事変に際して満鉄図書館は軍部への支援に活発な活動を行う一方、中国側の図書館は戦火による打撃をもろに被ってしまう。

1932（昭和7）年3月「民族協和」「王道楽土」の国家建設をスローガンに「満洲国」が建国されるが、その実態は日本の植民地であり、日本人が植民地支配者として君臨し、その他の民族——その多くは中国人——を差別する社会であった。その図書館界もまた在満の日本人にサービスする図書館と、日本人に支配され停滞の中にある中国人の図書館に分裂していた。楠田の読書倶楽部もこの構造にとらわれていた。彼の読書倶楽部の会員には日本人の女性の名前しか見あたらないのである。

1945（昭和20）年8月、大日本帝国が瓦解すると同時に「満洲国」も崩壊した。この時満洲は悲劇と混乱の中に投げ込まれ、楠田の消息もこの中に溶解してしまう。その後の彼の消息は現在のところ明らかではない。

再び館外活動が地方中小公共図書館発展の戦略として提起されるのは、彼がその実践を青年図書館員聯盟の機関誌に発表してから約30年後のことである。

『図書館史(近代日本編) 7』の編集を終えて

山口 源治郎

(東京学芸大学)

司書講習省令科目の改訂に伴い、新科目に合わせて司書講習教科書の改訂作業が

一斉に開始されている。私の知る限り、5社のテキストシリーズが刊行を開始している。『新編図書館学教育資料集成』（全9巻、教育史料出版会）もこうした改訂作業の一つである。今回の改訂では、旧版（1978年版、1989年版）まで石井敦氏が担当されていた『図書館史（近代日本編）』の編集を、小川徹と山口源治郎が引き継いだ。

本書の編集方針については、「はしがき」（小川徹）に示した通りであるが、旧版に集約された石井氏の研究を継承し、その後の日本図書館史研究の成果を取り入れながら発展させることができないかと微力を尽くしてみた。新編は旧版と次の点で異なっている。①前近代（近世）の部を加えたこと、②時期区分を改めたこと、③資料のグルーピングを改めたこと、④史料の加除を行ったこと、である。

まず、前近代（近世）の部を加えたことであるが、旧版では前近代は全く位置づけられておらず、近代に入りいきなり図書館制度が外国から移入されるかのような印象を免れない。しかし近世においても図書館づくりの民衆的努力があったのであり、そのことを歴史的に位置づける必要がある。その努力が近代においてどのように継承ないし変容していったのかは、今後の重要な研究課題であるが、民権結社や農事諸会の書籍縦覧所、青年団図書館への底流となった可能性は否定できないと考えられる。

旧版では、必ずしも時期区分という面では一貫性をもっていない。例えば「Ⅲ．歪められた図書館像」という部分では、明治末期から敗戦までを思想善導機関化という面で通覧するものであるし、大正期図書館の独自性についての認識も弱い。そこで近代日本の図書館形成の過程を、トータルに認識する観点から新たな時期区分を試みた。そこでは図書館政策の変容を主軸におきながらも、他方にそれに原理的に対抗する民衆的図書館づくりの系譜を対置し、この二つの図書館づくりの対抗・矛盾関係のはざまに相対的独自性をもって運動する図書館界を含んで、総体としてのわが国の図書館形成史を描こうとした。そうした観点から新しい時期区分を次のように設定した。①前近代（近世）②「開明期」の図書館（明治初期）③自由民権運動と図書館④通俗図書館の形成・確立（明治中期から末期）⑤大正デモクラシーと図書館（大正期から昭和初期）⑥ファシズムと図書館（昭和初期から敗戦）⑦戦後改革と図書館（敗戦から1950年代）⑧市民の図書館の創造（1960年代以降）

また上の視点から、それぞれの時期についておおよそ次のような資料のグルーピングを行った。①図書館政策②特徴的な図書館サービスと図書館思想③図書館界の動き④民衆的図書館創造運動⑤図書館法規。

史料の加除については、石井氏の収集した資料を基礎としたが、結果として相当数の史料の差し替えを行った。またその際石井氏の収集した資料についても原史料に当たり誤植等の訂正を行った。

言い古された観もあるが、歴史は「現代との対話」（E. H. カー）であるが、私たちも今回の改訂に当たり、転換期の図書館を強烈に意識して編集作業を進めた。そうした意識がどう現れているか、また図書館史として成功しているのか否かは読者の判断にゆだねる他はない。

1998年度日本図書館文化史研究会 第15回研究集会・総会
— 発表者の募集について —

日本図書館文化史研究会では、下記の要領で研究集会・総会を開催します。研究集会第2日目の個人研究発表（自由発表）希望者を募集します。

個人研究発表希望者は、6月20日までに、氏名、住所、電話番号、所属、発表の題目を記載し、下記までお申し込みください。発表時間は、質疑を含めて45分を予定していますが、申し込み件数によっては調整させていただくことがあります。

なお、第1日目のテーマ及び発表者は調整中です。

研究集会・総会の詳しい内容については、「ニューズレター」の次号(1998.8)でお知らせします。

記

1998年度日本図書館文化史研究会 第15回研究集会・総会開催要領

日時 : 1998年9月20日(日)午後1時

～21日(月)午後4時(予定)

会場 : 京大会館(〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9)

参加費 : 未定

プログラム(予定) :

第1日目(9/20) テーマに沿って、発表および討論(午後)

第2日目(9/21) 自由発表および質疑応答(午前および午後)

* 日本図書館文化史研究会総会(午後3時～4時)

第1日目終了後、「懇親会」を予定しています。

なお、宿泊は斡旋できませんので、各自で手配してください。

川崎 良孝

『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』 が刊行される

小川 徹
(法政大学)

『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』（オーラルヒストリー研究会編、日本図書館協会）が刊行されました。

この本はオーラルヒストリー研究会が多くの方々の協力をえて作成したもので、資料集であるとともに、読み物としても恰好のものとなるよう編集されています。

『中小都市における公共図書館の運営』（以下「中小レポート」）作成に関わった六人の方々へのインタビュー部分(p. 3-241)が中心で、関連資料(p. 243-314)、山口源治郎さんの解説(p. 315-375)からなっています。「中小レポート」の作成過程が関係者の証言を通じて明らかになっていく様子は、そこに現れているそれぞれの方のお人柄、共通して率直に語られている様子、後のものが始めて聞く話、証言相互の違いなどもふくめて、共感がえられるところ少なくなく、大いに興味がそそられるところです。

関連資料は石井敦・森崎震二両氏所蔵の貴重な記録と年表・文献目録。いずれも大切なものです。聞き書きがどれほど歴史の証言として意味をもちうるか、図書館文化史の領域において検証されるべきひとつの素材としても意義があると考えられます。山口さんの解説とあとがき（川崎良孝さん）から、オーラルヒストリー研究会の誕生のこと、この共同作業の経過などをうかがうことが出来て、貴重です。

「中小レポート」は1960年代初頭にあって、ひとつの選択肢として提示されたものですが、それが何故選択され、その後その考えが主流になったのか、を考えるうえでこの本は読者を刺激してやみません。1960年代初頭は（1960年の国勢調査ではじめて第一次産業の従事者数が第二次・第三次産業従事者の数を下回るのですが）まだこの国には自然の豊かな農村社会が広く残っていました。そういう中で「都市における図書館」をテーマの中心に据えたことはひとつの見識です。都市、もっぱらそこで営まれるひとびとの消費生活＝労働力の生産と再生産のための図書館が中心テーマになって行く訳ですが、そのことによって、農村・農業生産と結びついた図書館活動への視線が薄れ、消えてゆきます。その根底の問題意識（の転換）がどのようなものであり、それを支える思想、私の関心から言えば、戦後民主主義がどのように意識され、理解されていたのか、は大きな問題ですし、それがその後の図書館サービスの展開過程にどのような影響を与えてきているのか、等考えるべき問題は少なくなくありません。この本は「中小レポート」を検討するうえで豊かな素材を提供してくれています。

この本について、いずれ詳細な検討に基づく書評は本誌でも行われることでありましょうが、多くの方がお読みになり、多様な議論が起こることを期待するものです。

寄贈資料のお知らせ

◇浪江虔『注目すべき市区町村立図書館の一覧表 1996年度の実績と97年度当初の現況について』町田の図書館活動をすすめる会 1998 32p.

◇『京都府立図書館－失われた歴史的建造物－』京都近代建築を考える会 1998 24p.

◇オーラルヒストリー研究会から、『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』（日本図書館協会 1998 386p.）が寄贈されました。以下に、目次を紹介します。

I. インタビュー記録

①前川恒雄氏、②石井敦氏、③清水正三氏、④黒田一之氏、⑤ 鈴木四郎氏、⑥ 森崎震二氏

II. 中小レポート関係資料

III. 解説（山口源治郎）

☆研究例会、または研究集会の会場でお渡しできる方に限り、上記『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』を特別価格でお分けします。ご希望の方は、予め下記までご連絡ください。

小黒 浩司

TEL 02-2777-2222

〔新入会員〕

〔変更等〕

“Library History”のご案内

イギリスでは、従来Library History Groupがあり、機関誌“Library History”を刊行していましたが、今回新しい国際誌としてパンフレットで示す雑誌になりました。

編集長から、個人あるいは図書館で購入していただきたいと、パンフレットが送られて来ました。なお、同誌に投稿されようとする人は、川崎までご連絡いただくと好都合です。
(川崎 良孝)

原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』16号（1999年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は99年3月末日です。投稿を予定される方は、下記までご一報下さい。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

問合わせ、並びに原稿の送付先

小黒 浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

◇1998年度第1回

日時：1998年6月20日（土）午後1時～3時（予定）

場所：国立国会図書館 午後1時西口に集合（6F「サークル室」を予定）

発表：石山 洋：日本の博物館と図書館の創設をめぐって—町田久成を中心として—

小川 徹：永嶺重敏氏「黙読の〈制度化〉」（『図書館界』45(4)1993.10）
及び「明治期の公共図書館と利用者」（『同上誌』49(5)1998.1）などについて

* 永嶺重敏氏は、『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部 1997 281p.）の著作があります。

今後の予定

◇1998年度 第2回 1998年12月 日時・場所は未定

* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。申し込みは事務局まで。

1998年度第1回運営委員会のお知らせ

下記のとおり運営委員会を開催いたします。

記

日時：6月20日（土） 3時～4時（研究例会終了後の予定）

場所：研究例会の会場に同じ

協議事項：1998年度総会(9/21)議題・報告の件ほか

事務局から

◇振込用紙を同封しますので、今年度の会費（年額 3,000円）の納入をお願いいたします。なお、前年度分未納の方（15名）は、2年分で6,000円です。

住所変更、異動等ありましたら「通信欄」にご記入ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明